

バオバブ保育園ちいさな家

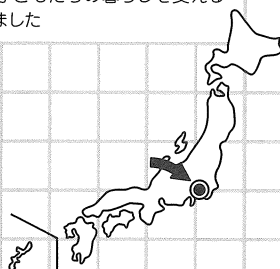
東京都多摩市

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第7回は東京都多摩市にあるバオバブ保育園ちいさな家。0歳から2歳までの小さな子どもたちの暮らしを支える場を訪れました



バオバブ保育園ちいさな家は、新宿から京王線で約三十分、聖蹟桜ヶ丘駅から徒歩三分の所にある。駅前大きなショッピングモールや高層マンションが保育園の背景のように建ち並んでいるのだが、保育園の敷地に一步入ると、そんな街の様子を忘れるほどに、静かでゆつたりとした時間が流れていた。

ここ、バオバブ保育園ちいさな家には、〇・一・二歳の子どもが約三十人、暮らしている。ちいさな家から徒歩十分ほどの所にバオバブ保育園（「おおきな家」と呼ばれる）があり、三歳からはそこへ通うことが想定されている。ちいさな家はその名とおり規模が小さく、小さな子どもたちの暮らしの場という雰囲気がある。

◆保育の目標に込められた保育者の願い

一九七三年に開設されたバオバブ保育園に始まり、一九九八年に若葉台バオバブ保育園、二〇〇一年にここ、バオバブ保育園ちいさな家、二〇〇六年にバオバブ霧が丘保育園が誕生した。それぞれの園

には、それぞれの個性があるものの、四園を支える
バオバブ保育園としての基盤がどっしりとある。

子どもたちが、

・自分を大切に思える人

・柔らかに開かれた心を持ち、さまざまな人と共に
生きていける人

に育っていくことを願い、保護者と共に子育てを
すすめる。

この保育目標は、「今の子どもたちに育ってほしい
姿は何だろうと、これまで何度も検討を重ね、書き
換えてきた」ものだと、遠山洋一園長から話を伺
った。いつも、そこにいる子どもたちを見つめ、子
どもたちの育ちを願う気持ち伝わってくる。

◆思い思いに過ごす庭

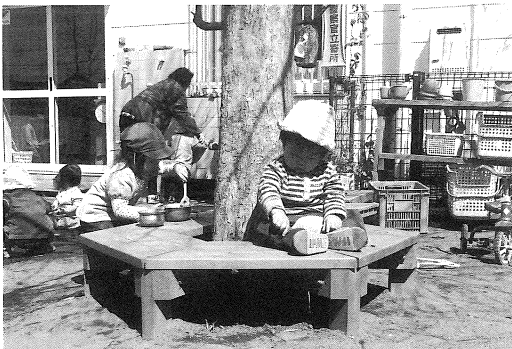
門を入るとすぐ右手に園庭がある。園庭は全面に
たっぷりと砂が敷かれ、中央には小さな山があった。

園庭では、子どもたちがそれぞれに土に向かい、水
に向かい、山に向かい、黙々と遊んでいる。

私たちも、そつと腰を下ろして見てみると、子ども
たちが水をたたく音やジャンプして土をける音が
聞こえるほど静かだということに気付く。

ふと、中央の大きな
木を囲むベンチを見る
と、白い帽子の男の子
が、三月の暖かい陽を
浴び、靴を触っている
うちにウトウトし始め
た。時々、カクツと頭
が揺れる。そのたびに、
ちよつと目を開けるの
だが、またすぐにウト
ウト……。この園庭の
心地よさを物語ってい
る。

その奥では、地面に





行方をたどる目が真剣だ。もう、顔も手も足もお尻も、泥水でびしょびしょだが、そんなことは構いなし。ただただ、水と砂に向かっている。保育者は、少し離れた所でずっと見守っていて、そのまなざしがとても温かい。

三輪車に乗る子どもは、それぞれに荷物を載せて運んだり、車輪の動きにじっと身を任せたりしている。そして、築山の周りを走らせているうちに、何台かの三輪車が連なっていく。一人ひとりが自



分のやりたいことに向かいながらも、そこに暮らしている人たちの姿を互いに見ていて、自然に惹かれ合い、つながっていく姿があった。

◆家族団らんのような温かい雰囲気の中で

「そろそろ」と声が掛かり、シャワーを浴び、手を洗い、室内に上がっていく子どもたち。園庭から一人減り、二人減り……、気が付くと残っているのは二歳児のみとなっていた。一歳児の後を追っていくと、小さな体をいっぱいに使って、階段を丁寧に一段一段登っている。二階に上がると、大きな山を登ったような達成感。「すごい？」と得意げに振り返る笑顔がとてもいとおしい。

○歳児クラスでは、昼食をとり始めていた。これからの食事を楽しみに自らエプロンを着けようとしている姿や、スプーンを握り次々にスープを口に運ぶ懸命な姿に、生き生きとした力を感じる。

一歳になったばかりの小さな子どもが「ん」と言うのと、保育者が「おかわり？」と尋ねる。そして、



子どもが「ん」と言い、保育者がスープ皿を手にする、子どもはうれしそうに、満面の笑みを浮かべる。小さな子どもと保育者のやりとりが、ほほ笑ましい。一つのテーブルを三人の子どもと一人の保育者が囲んでいる様子は、家族団らんのひとときを思わせる、温かい

雰囲気だった。次に一歳児クラスをのぞくと、静かに食べる子どもたちの様子に、保育者が「いつもはとつてもにぎやかなんですが」と言葉を添えてくれる。

私たちも少し遠慮して、離れた所からこっそりとのぞかせてもらうが、大きな背中を丸めても、突然の訪問者の存在は大きくて、申し訳ないような気持ちになる。小さな子どもたちの暮らしの繊細さを感じ、早々に退室することにした。

◆「ちいさな家」の雰囲気を作り出しているモノ

昼食の様子をそつとのぞいている時に、思わず「おひつー」と驚きを声に出してしまった。炊きたてのご飯が、おひつに入って保育室に届けられているのだ。木のワゴンに載せられて届くご飯、配膳用の小さな座卓に並べられたおひつにお鍋、ホーローのヤカン。それ

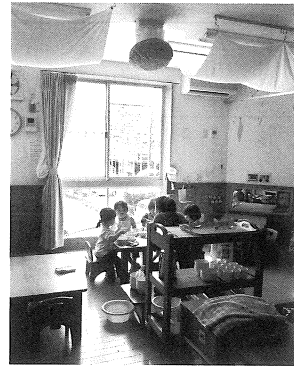
らのモノから醸し出される昔懐かしいような家庭的な雰囲気は、きつと子どもたちだけでなく、その両親をもタイムスリップさせ、安心させてくれるものに近い。

また、保育室全体からも、安心感が得られる。木を基調にした落ち着いた保育室に、大きな窓から暖



かい光が差している。

天井は高く、照明には自然素材の布が掛けられていて、柔らかい雰囲気になっている。壁や天井には、ひもが何本も掛けられていて、その先に



洗濯バサミが付いている。そこに提げられている子どもたちの作品や遊びの道具が、保育室の雰囲気を一層柔らかく、温かくするオブジェになっている。

◆地域の子育てを支える大きなバオバブの木

最後に、親子サロン「びーだま」に案内してもらった。園舎内のホールが、通常は地域子育てひろばとして地域に開放されており、〇歳から二歳までの親子が遊びに来ている。ちょうどこちらでも昼食の時間で、座卓に座り、各自が持ってきたお弁当を広げて、和やかに食べ始めていた。

その中で、一人の男の子

が、「ここでお昼ご飯を食べたかった」と泣いて、なかなか気持ちが治まらない。それを見て、スタッフが、

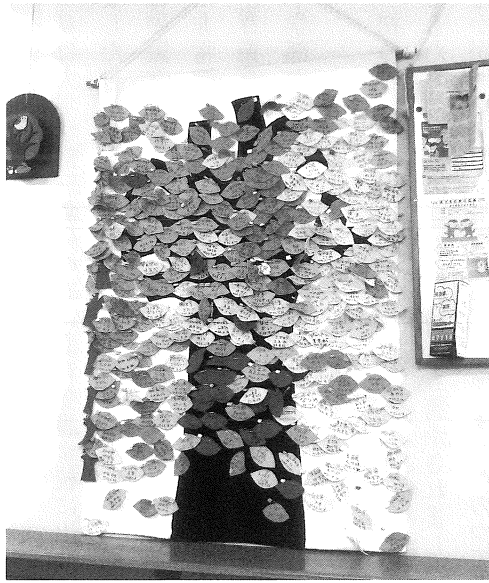
「買ってきたら？」と声を掛けた。母親が急ぎでお昼ご飯を買いに出かけるその間、その子どもは泣いていたことを忘れたかのようにスタッフと共にパズルで

遊んで待っていた。親も子も安心して居られる場になっっているということがわかる。

室内には、さまざまなオブジェがある。天井には風を感じる手作りのモビール、壁には保育者や母親たちの手作りの装飾や絵が飾られている。中でも目を引くのは、色とりどりの葉っぱが生い茂る大



きなバオバブの木の壁掛けだ。よく見ると、葉っぱには名前が書かれている。この「びーだま」の利用



者の名前である。これを見ると、バオバブ保育園が、地域に根付き、大きな幹と枝で地域の人たちを支え、つながりを広げていることを感じる。

小さな子どもたちの暮らしを支える、大きなバオバブの木。地域の中にあるその存在の大切さと、そこから紡ぎ出される生活の豊かさを感じた。

そして、遠山園長先生のお話を伺っていると、柔らかに静かな語り口でありながら、言葉一つひとつの重みがあり、揺るぎない信念を感じる。バオバブ保育園をつくり、支え続ける遠山園長先生の存在そのものに、バオバブの木のイメージが重なった。



訪問者／伊集院・川辺・宮里

文／川辺尚子

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

— 訪問メモ —

訪問時期：2012年3月

訪問場所：社会福祉法人バオバブ保育の会
バオバブ保育園ちいさな家

〔住所〕 東京都多摩市一ノ宮 3-1-16

〔電話〕 042-375-4701

〔FAX〕 042-374-5473